

目の前で坂本龍馬が軍鶏鍋をつついている。

私は手の中の取り皿を眺めながら、必死に状況を整理していた。

ちなみに坂本龍馬とは、私の飼っている軍鶏の名前だ。要するに、共食いだ。

龍馬は満足そうに空になった取り皿を羽でたたいた。

どうやらお代わりをご所望らしい。

その様子を見ていた友人の中岡（ちなみに彼の名前は慎之介である）が笑って、鍋の具をよそった。

坂本龍馬の手に渡るはずだったその小皿はフランシスコ＝ザビエルによって取り上げられた。

だが龍馬もただではおかない。威嚇の声をあげるとザビエルに襲い掛かった。

その声は言葉にはなっていないが、言いたいことはわかる。

「何をする！このハゲー！」である。

「あなたにはこの味はわからないでしょう」（ザビエル）

「まあまあ、その辺にして」中岡が仲裁に入った。「そろそろ龍馬を煮ることにしよう！」

「ああ」私は答えた。「ならばザビエルは刺身にでもするとしよう」

お気づきの方も多いだろうが、ザビエルは蛸である。

「師匠！そんなとこを言うものではありません！そもそも今日は会議の予定だったはずですよ！」

この中では一番若い新宮が言った。彼は少々真面目すぎるのが欠点だ。

いそぎんちゃくが真面目なのは世の常識であるが、友人を煮ようとする中岡を少しは見習ってほしいものである。

「そうだそうだ！」ザビエルが抗議の声を上げる。茹で蛸のように真っ赤になりながら—いや、彼は元から蛸であるが—その細長い脚をぶん回している。

「ぶつ切りにしてワサビをぬりたくられるなんて勘弁ですからね、あんなこと蛮族のすることです」

今までだまって鍋をつついていたチンギスハンが近くの冷蔵庫からチューブのワサビをとりだした。ザビエルの抗議の声は耳に入っていない。

種族の壁は厚い。

ところで、私たちが今鍋を囲んでいる場所はサバンナの平原であるわけなのだが、先程からずっとライオンが鍋を虎視眈々と狙っている。

ああっ……。坂本龍馬がライオンに攫われたっ……。

ザビエルが追いかけてしようとするのだが、如何せんここは陸地である。

一瞬にしてザビエルは動く砂のかたまりと化した。

そう、ここはサバンナ。蛸もいそぎんちゃくも砂と化す、かれはたてた大地である。飢えた生物

だけが生き残れる弱肉強食の世界なのだ。

「光あれっ！！」

私に残された選択肢は最早此れ一つしかなかったと言えよう。

刹那、辺りは白に包まれ無へと回帰した。

「……無だ。」

さあ再び世界を書き表わそう。

私はここまでであるがさらなる次の私が継ぐことを期待して……。

しかし無は、新たなる有を生み出す。

ある時無から、新たなる生命が生まれた。私はそれを坂本龍馬と名付けた。

このようにして、私が経営している東京都白山にある「鍋蔵」の名物である軍鶏鍋は作られている。

私事ではありますが、先日彼女ができました。

爆発しました、南無三

余談ではあるが、北海道名物ジンギスカンにワサビを用いる人がいることはこの逸話が元になっている。

end

(この文章は平成 27 年度東洋大学白山祭 2 日目に有志の力で完成した文章です。  
実在の団体、個人名などとは全く関係のないものとなります。)